

田村俊子と汪精衛

―『雙照樓詩詞藁』の二編の詩をめぐって

黒澤 亜里子

従来、中国時代の田村俊子の活動は、瀬戸内晴美著『田村俊子』（文藝春秋社、一九六一年）などの伝記的な記述に頼ることが多く、具体的なテクストによる検証がほとんどなかった。現在刊行中の田村俊子全集（黒澤亜里子監修・編集、全九巻、ゆまに書房）によつて、新たな作品が数多く発掘され、この時期の俊子の仕事もすだいに明らかになりつつある。「脂粉の女作者」、「落魄の老作家」といった固定したイメージにとられず、日本、カナダ、帰国後、中国時代をつなぐ新しい視点から俊子の仕事の全体像をとらえることが必要な時期に来ているといえるだろう。本稿では、一九三九（昭和一四）年の年末に、汪精衛〔注1〕が田村俊子に贈った『雙照樓詩詞藁（そうしようろ う ししこう）』中の三編の漢詩を紹介し、若干の考察を加える。

一 時代背景

田村俊子〔注2〕が、厳重な警戒が敷かれる上海の「汪公館」（愚園路一一三六弄三一号）を訪問したのは、日中戦争のさなか、一九三九（昭和一四）年二月二二日のことである。日本の雑誌『改造』の派遣記者として汪精衛を取材するためである。

当時、「徹底抗日派」の蒋介石に対し、「和平派」の中心と目された汪精衛の人気は高く、戦争の長期化に倦みはじめた日本国内では、「時の氏神」、「東洋の巨人」ともてはやされた時期である。汪は、蒋介石のもとで国民党の副総裁をしていたが、水面下で日本側との交渉を重ね、ひそかに重慶を脱出（一九三八年十二月十八日）、同十二月

二十二日に近衛文麿首相が発した第三次声明（善隣友好、共同防共、経済提携）に呼応し、重慶の蒋介石に対して「和平反共救国」を呼びかける「艶電」（同月二十九日付）を発していた。

俊子の訪問時には、汪精衛は「南京新政府」樹立に向けた日中間交渉のただ中にいた。汪の周辺にはつねに暗殺の危険があり、汪公館周辺には物々しい警戒が敷かれていた。ハノイ滞在中に起こった暗殺未遂事件（一九三七年三月二一日）では、腹心の曾仲鳴が重慶政府の派遣した藍衣社のメンバーに射殺され、妻の陳璧君も銃弾を受けて負傷している。この時、汪は隣の部屋に寝ていて無事だったが、かつての国民党六中全会の狙撃事件（一九三五年）では汪自身が三発の銃弾を受けている。

奇しくも、俊子が訪問した十二月二十二日は、一年前に第三次近衛声明が出された当日にあたる。この時、汪らと影佐機関の和平交渉は最終局面に入っていた。十二月二十六日から三十日にかけての最終交渉を経て、「日支新關係調整要項」（協議書）の最終案が合意されたのは、俊子の訪問の数日後、十二月三十日のことである。これを受けて、翌年三月三十日、汪精衛を代表とする「中華民国南京政府」が正式に発足することになる（以上の背景と田村俊子とのかかわりの詳細については黒澤亜里子による解題「中国時代」『田村俊子全集』前出、を参照のこと）。

こうした背景と併せて考えるとき、俊子との面談の際に、汪精衛がみずからの漢詩集『雙照樓詩詞藁』を俊子に贈呈したことは、文人政治家らしいきわめて含蓄に富む行為である。すなわち、俊子という女性取材者への個人的な配慮やサービスもあつただろうが、同時に、当時の緊張した情勢の中で、日本の知識人読者や、政権側の交渉担当者に対し、自己の本心、政治的な決断を暗示的に伝える意味も含めて、きわめて高度な外交的行為（パフォーマンズ）だったとみなすことができるだろう。

俊子自身も指摘しているように、この詩集は、暗殺された曾仲鳴を編集人として出版されている。さらに汪はこの詩集を贈るにあたり、自分の好きな三つの詩に印をつけて渡すという心遣いをみせている。これら三つの詩は、制作年代自体は古いものがほとんどだが、南京新政府樹立に向けて動き出した、当時の汪精衛の立場や心境と併せて大変興味深いものがある。すなわち、若き日に清朝要人の暗殺を企てたテロリストとして、死を覚悟した獄中での心境、死んだ盟友への思い、大事に臨み、水に乗り出す小舟の孤独や、澄み渡った鏡のような心境、自己の運命への従順等々

である。以下に、汪精衛が示した三つの詩の出典および大意を紹介したい。

二 『雙照樓詩詞藁』の典拠

『雙照樓詩詞藁』のテキストには、最初の単行本、曾仲鳴編『雙照樓詩詞藁 小休集（上・下）』をはじめ、以下の五つの主要な版がある。俊子が贈呈されたのは、曾仲鳴編集の初版（一）である。

- 一、曾仲鳴編『雙照樓詩詞藁 小休集（上・下）』、民信公司刊、一九三〇年二月。
- 二、黒根祥編集校本、『雙照樓詩詞藁、「掃葉集」を増補』、大北京社、一九四一年三月。
- 三、『雙照樓詩詞藁』三卷（「小休集」、「掃葉集」を増補）、中華日報社、一九四一年八月。
- 四、陳群編『雙照樓詩詞藁』三卷（中華日報版を増削）、澤存書庫刊、一九四二年三月。
- 五、汪首席遺訓編纂委員会編『雙照樓詩詞藁』（三十年以後作）一卷を増補、一九四五年五月。

最後に挙げた「汪首席遺訓編纂委員会編」の刊本は、汪精衛没後、初めて主要な作品を網羅した全本である。この他にも汪の妻である陳璧君による書写本『陳璧君獄中手抄本』（台湾東吳大学図書館蔵）や遺族による増補版の他、多くの版がある。本稿が、主として参照、引用したのは狂夢川註解『雙照樓詩詞藁』（天地圖書有限公司刊、二〇一二年四月初版／六月第二版香港）である。

三 三編の詩「感懷」「述懷」「海上」の大意

先述のように、俊子と面談した際、汪精衛は三つの詩に○印をつけて渡したという（「汪精衛と洪秀全を語る」一九四〇（昭和一五）年二月一日発行『改造』第三二卷第二号に掲載。訪問取材記。署名は佐藤俊子）。以下に、そ

れら三編の詩を引用し、大意を記す。

◇詩の引用（三編）

感懷

士為天下生，亦為天下死。方其未死時，怛怛終不已。宵來魂躍躍，一驚三萬里。山川如我憶，相見各含睇。願言發清音，一為洗塵耳。醒來思如何，斜月淡如水。

（大意）士は天下の為に生き、また天下の為に死す。まさに其れ未だ死せざる時、怛怛として終に己ま^いず。宵來たれば魂躍々とし、一に驚^{おど}す三万里。山川は我が憶^{おぼ}いの如く、相見て各々涕を含む。願わくばここに清音を發し、一に塵耳を洗うを為す。醒め來たれば思い如何せん、斜月淡きこと水の如し。

述懷

形骸有死生，性情有哀樂。此生何所為，此情何所託。嗟余幼孤露，學殖苦磽確。蓼莪懷辛酸，菜根甘淡泊。心欲依墳塋，身欲棲巖壑。憂患來薄人，其勢疾如撲。一朝出門去，萬里驚寥落。感時積磊塊，頓欲忘疏略。鋒鋌未淬厲，持以試盤錯。蒼茫越關山，暮色照行囊。瘴雨黯蠻荒，寒雲蔽窮朔。山川氣淒愴，華采亦銷鑠。愀然不敢顧，俯仰有餘怍。遂令新亭淚，一灑已千斛。回頭望故鄉，中情自惕若。尚憶牽衣時，謬把歸期約。蕭條庭前樹，上有慈烏啄。孤姪纏襟中，視我眸灼灼。兒乎其已喻，使我心如斫。沈沈此一別，賸有夢魂噩。

哀哉衆生病，欲救無良藥。歌哭亦徒爾，搔爬苦不着。針砭不見血，痿痺何由作。驅車易水傍，嗚咽聲如昨。漸離不可見，燕市成荒寞。悲風天際來，驚塵暗城郭。萬象刺心目，痛苦甚炮烙。恨如九鼎壓，命似一毛擢。大椎飛博浪，比戶十日索。初心雖不遂，死所亦已獲。此時神明靜，蕭然臨湯鑊。九死誠不辭，所失但軀殼。悠悠檻穽中，師友磋已邈。我書如我師，對越凜矩矱，昨夜我師言，孺子頗不惡。但有一事劣，昧昧無由覺。如何習靜久，輒爾心躍躍。有如寒潭深，潛虯自騰轆。又如秋颯動，鷲鳥聳以愕。百感紛相乘，至道終隔膜。悚息聞師言，愧汗駭如濯。平生慕慷慨，養氣殊未學。哀樂過劇烈，精氣潛摧剝。餘生何足論，魂魄亦已弱。痾瘵耿在抱，涵泳歸沖漠。琅琅讀西銘，清響動寥廓。

(大意) 形骸は死生あり、性情は哀樂あり。此の生何の為す所ぞ、此の情何の託する所ぞ。嗟余幼くして孤露にして、学殖確確に苦しむ。蓼我の辛酸を懐い、菜根の淡泊に甘んず。心は墳塋に依らんと欲し、身は巖壑に棲まんと欲す。憂患来りて人に薄り、其の勢疾きこと撲つが如し。一朝門を出でて去けば、万里の寥落に驚く。時に感じては磊塊を積み、頻に忘れて疎略ならんと欲す。鋒鋷として未だ淬厲ならず、持し以て盤錯を試みんとす。蒼茫たる関山を越え、暮色は行藁を照らす。瘴風蠻荒を暗くし、寒雲窮朔を蔽う。山川の気悽愴として、華采また銷鑠あり。愀然敢て顧みず、俯仰して餘作あり。遂に新たに涙を亭ら令め、一灑已に千斛なり。頭を回らして故郷を望めば、中情自ずから惕若たり。尚、牽衣の時を憶い、帰期の約を謬把す。簫條たる庭前の樹、上に慈鳥の啄むあり。孤姪襦袢の中、我を視る眸灼々たり。兎乎其れ已に喩り、我が心を斫か使む。沈々たるこの一別、あまつさえ夢魂の驅あり。哀しいかな衆生の病、救わんと欲するに良薬なし。歌哭するもまた徒らなり、搔爬するも苦しみは着かず。針砭は血を観ず、痿痺は何に由りてか作る。易水の傍らに車を驅れば、嗚咽の声昨の如し。漸離見る可からず、燕市荒莫となる。悲風は天際より来たりて、驚塵は城郭を暗くす。万象は心目を痛ましめ、痛苦は炮烙よりも甚だし。恨みは九鼎の如く壓し、命は

一毛を擡たくに似たり。大椎博浪に飛び、比戸十日の索。初心遂げずと雖も、また死す所を獲たり。此の時神明静かにして、蕭然として湯鑊とうかくに臨む。九死誠に辞せず、失う所はただ軀殼のみ。悠々たる檻穽けいせいの中、師友已に遠かなるを嗟なげく。我が書は我が師の如く、対越して矩矱くわくを凜す。昨夜わが師言えり、孺子頗る悪まず。ただ一事の劣あり。味々に覚ゆるに由無し。如何ぞ習静久しくし、すなわち爾なんぢの心躍躍せん。寒潭深くして、潜刺せんし自ら騰轉とせんとするが如きあり。また秋飊しゅうひやうの動き、鷺鳥しろうちやうの聳おそれて以て愕おそろすが如し。百感紛として相乗じ、至道終に隔膜つひたり。悚息しゆそくとして師の言を聞けば、愧汗くわいあせして骸せがき濯あられるが如し。平生慷慨を慕い、氣を養うこと殊に未だ字あばず。哀樂劇烈に過ぎ、精氣潜んで摧剥さいはくす。余生何ぞ論ずるに足らん、魂魄また已に弱し。痾瘵こうざい耿こうに抱くあり、涵泳ちゆうえいして沖漠ちゆうばくに帰す。琅々と西銘を読めば、清響は寥廓りょうかくを動かす。

海上

明明天邊月，蕩蕩海上波。白雲與之潔，清風與之和。有如赤子心，萬事相涅槃。憂患雖已深，坦白仍靡它。君看寒光澈，碧海成銀河。一葦縱所如，萬里無坎軻。

(大意) 明々たる天辺の月、蕩々たる海上の波。白雲これとともに潔く、清風これとともに和らぐ。赤子の心の如きあらば、万事相涅槃す。憂患は已に深しと雖も、坦白仍な它靡なし。君看みよ寒光澈せきして、碧海銀河となるを。一葦いはい縱まままままに如く所、万里を渡るに坎軻かんかなし。

四 若干の考察

以上の三つの詩をもとに、不十分ながら現時点での見通しを以下に述べ、今後の研究課題としたい。

『雙照樓詩詞藁』に収録されたこれら三つの詩は、「感懷」、「述懷」(一九一〇年)、「海上」(一九二六年)とそれぞれ

れ違ふ時期に書かれたものであり、俊子が汪精衛と面会した当時から数えれば、十年から二十年以上も前の詩作である。にもかかわらず、日中戦争下の上海という時間と空間の中で、汪精衛自身が印をつけ（強調／編集）、俊子に手渡した行為により二次的な意味やつながりが付与され、「一九三九年十二月二十二日」の〈新たな物語〉が再構成されたこと。さらに、それが過去、現在、未来を暗示するより立体的な物語空間が浮かび上がる契機ともなり、読解の重奏的な魅力が増したことである。

たとえば、「感懷」、「述懷」は、若き日の汪精衛が清朝の要人暗殺を計画し、投獄され獄中で書かれた宣統二年（一九一〇年）の詩である。孫文とともに辛亥革命の大義のために生命を賭す覚悟はすでにできていた。爆弾をもって醇親王載灃を狙ったこの事件は未遂に終わったが、この時、汪はすでに一度死刑を覚悟している。また、一九三九年の時点でも、汪の周囲には常に暗殺者の影があり、この年の三月に盟友曾仲鳴が暗殺されている。「天下の為に生き、死ぬ士大夫」であり、愛国者を理想とする汪としては、いつ死んでも悔いはない心境だったろう。

これらの詩には、日本との和平交渉の調印を数日後に控え、大事に臨む覚悟と不安、孤独等々の心境がみずみずしい感情をもって描かれている。三編の詩の最後の「海上」は孫文とともにハノイに亡命し、その遺志を継ぐために帰国する途上の心境を詠んだ詩と思われるが、ここでは、五十四歳となった汪自身の当時の心境を重ねたとと思われる。月光の下、壮大な天の川を渡る小舟の喩え（憂患は深しと雖も、初心は決して変わらず。寒光激するを看れば、碧海は銀河となる。進みゆく一艘の小舟の如く、万里の河を渡るに坎坷なし）は、自然の風景と心理が一体となった美しい一節である。

田村俊子は、汪氏との面談後にホテルの自室でこれらの三編の詩を読み返し、その感想を次のようなことばで結んでいる。

人生の深さを、自からの生命をもつて常にはかる——汪精衛氏は然う云ふ人格を持つ人であらう。政治家としてではなく、文人である氏の一面を有する氏に接して、私に残された印象はこれであった。

政治家としての汪精衛の評価は別としても、文人汪精衛への評価と共感がうかがえる一文である。『雙照樓詩詞藁』

のもととなった汪精衛の書齋『雙照樓』の名の由来など、この他にも紹介したいことは数多いが、次稿にゆずりたい。本文中に引用した漢詩の修辭や読解については、王有紅、王冉、上里賢一の各先生から懇切なご教示、ご指摘をいただいた。とりわけ、原文の大意の翻訳については王有紅氏、漢詩の訓読については上里賢一先生に大変お世話になった。ここに記して心より感謝申し上げます。

註

〔1〕汪精衛（汪兆銘の呼称もあるが、中華圏では「汪精衛」が一般的）は、中華民國の政治家。日本留学中に孫文の革命思想に触れ、革命党に入党。辛亥革命により清朝が崩壊し、一九二二年一月一日に中華民國が成立した際には、汪が宣言文を起草したとされる。一九一七年、孫文の下で広東軍政府の最高顧問を務める。孫文の死後、蒋介石と汪精衛は対立と和解を繰り返したが、一九三二年一月に協力して「南京国民政府」を成立させた。一九三七（昭和一二）年七月の日中戦争開始後は、「徹底抗戦」派の蒋介石に対し、汪は水面下で日本側との和平を模索し、一九三八年十一月二十日に「日華協議記録」を調印、十二月十八日、重慶に疎開していた蒋介石の国民政府から離脱した。ただし、後に汪が日本占領下の南京で主席代理（一九四〇年十一月、主席に就任）として新政府を出発させたのは、重慶の蒋介石との統一政府を作る可能性を残したためともされる。

〔2〕田村 俊子（たむら としこ）、一八八四年（明治一七年）四月二五日—一九四五年（昭和二〇年）四月一六日）は、小説家。佐藤露英、佐藤俊子、本名、佐藤とし。東京府東京市浅草区蔵前町（現在の東京都台東区蔵前）生れ。代表作は『木乃伊（みいら）の口紅』、『焔烙（ほうらく）の刑』など。一九〇九年に夫田村松魚の勧めで書いた『あきらめ』が、一九一一（明治四四）年大阪朝日新聞懸賞小説一等になり文壇にデビュー、その後「青鞥」、「中央公論」、「新潮」に次々と小説を発表し、人気作家となるが、しだいに創作に行き詰る。朝日新聞の記者鈴木悦と恋愛が生じ、一九一八年、松魚と別れてカナダのバンクーバーへ移住。悦とともに現地の日字紙大陸日報の編集に参画する。一九三六年、悦の死去により帰国。一九三八年十二月、中国に渡り、晩年は上海で中国語婦人雑誌『女声』を主宰した。